

令和4年度第2回四万十町総合振興計画審議会 会議録

開催日時：令和4年6月30日（木）18：00～20：00

場所：本庁東庁舎 1階 多目的大ホール

出席者：横山 順一、百田 幸生、尾崎 弘明、神田 修、横山 泰久、
佐々木 将司、川添 節子、船村 覺、三浦 ひろみ、森 雅順、
山本 由美、野村 宏、鈴木 幸代、酒井 紀子、藤澤 久美子、
八木 雅昭、浅野 尊子

欠席者：太田 祥一、田邊 誠進、岡村 健志

■会議次第

1. 開会
2. 会長挨拶
3. 令和3年度地方創生推進交付金の効果検証について
4. その他
5. 閉会

■会議資料

1. 会議次第
2. 委員名簿
3. 令和3年度地方創生推進交付金事業評価資料
4. 令和3年度地方創生推進交付金経費内訳報告書
5. 委員評価シート

（事務局）

それでは定刻となりましたので、只今より第二回目になります総合振興計画審議会を始めさせていただきます。始めに会長からご挨拶をいただきたいと思います。

（八木会長）

皆さんこんにちは。今年も半分が終わろうとしておりますが、今年の梅雨はですね、非常に短い期間で6月も終わろうとしていますが、第2回総合振興計画審議会にご出席いただきましてありがとうございます。コロナウイルスの感染もなかなか収まらないということで、今日も高知県下で130人あまりが感染したという発表がありましたし、四万十町も感染者が発表されておりました。そういう意味で、もう2年半マスクをしながら暮らしを続けておりますけれども、一日も早くマスクがとれるようになっていただきたいと思います。この審議会も来月8月の初旬には、2年間の任期が来るということになります。そういう意味では今回と7月14日の会議の二回の会議になりますので、ぜひご協力お願いしたいと思います。

また、総合振興計画の後期計画につきましては、昨年度の秋に答申を致しましたので、SDGs やウィズコロナというところなども踏まえたくて、計画を推進していただくように答申しておりますので、ぜひとも今後の展開としてお願いしたいと考えています。

本日は地方創生推進交付金事業の効果検証ということで、担当課の方から説明を受けて、評価させていただくということですが、私達は行政職員ではありませんので、的確な評価ができるか分かりませんが、住民としての視点でその事業がどうであったかということでご意見をいただければいいかなと思っていますのでよろしくお願いします。限られた時間でございますがよろしくお願いします。

（事務局）

ありがとうございました。それではまず始めに資料の確認と評価の流れについて説明をさせていただきます。《説明省略》

（八木会長）

それではですね。早速、事業の内容について担当課の方からご説明をお願いしたいと思います。まず、1 番の四万十川の資源を活かす取り組み（1）流域資源の利活用というところですね。そちらの方から順番にお願いしたいと思います。

（企画課：中井四万十川振興室長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。では、続いて地産外商推進事業についてお願いします。

（にぎわい創出課：津野副課長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。1 番の項目を報告いただきましたが、評価シートの方に評価点や事業に対するアドバイスなどあれば記載いただきたいですが。その前にご質問等あればお願いします。

（横山(順一)委員）

ネット販売の再会を目指すというところですが、現在も協議を進めているという説明があったわけですが、やっぱりネット販売っていうのはすごく有効な手段だと思います。いろんな事業所が沢山あると思いますので、そういう事業所に支援が必要なところは支援をしてもらいたいと思いますが、いつ頃までにその協議が終わるか目途はたっていますか。

（八木会長）

ストップした理由もあると思うのですが、その点も整理をしながらお答えいただければと思います。

（にぎわい創出課：小笹課長）

ネット販売につきましては、昨年9月13日に一旦休止という形でサイトの方を休止させて頂いておりますが、サイト自体は残っておりまして、それを引き継ぐ形で1回リセットをして事業者を集め直すということになりました。現在再開に向けて動いておりまして、特に今異論は出ておりませんが、具体的な運営者というところがまだ決まっておらず、そこを今役場が中心となって組み立てているという状況です。10月1日を目途にいろんな作業を進めています。

（八木会長）

他にご質問はございませんか。

（浅野委員）

地産外商の部分ですが、いろんな支援がある中で事業費約1000万円あるうち、ネット販売と外商力強化と外商推進委託の中で一番事業費が大きい事業は何か知りたいのが1点と、それから、地産外商の支援メニューはどういう事業者をターゲットにおいて実施しているのか。例えば、地産外商はまだスタートしてないけれども、県内あるいはその地域で販売しているのでこれから地産外商を目指したい、あるいは既に地産外商に取り組んでいるが、なかなか自分の力だけでは思うようにいかないなど、いろんなパターンがあると思うのですが、こういった事業者さんを対象に支援メニューを考えられているのか。

それから商品開発ですけれども、商品開発に何か目標設定をしておりましたら、あるいは目標といかないまでも目指した商品開発があるのであれば教えていただきたいと思います。

（にぎわい創出課：小笹課長）

ネット販売、外商力強化、外商推進委託の中でどれが一番大きな金額かと言いますと、四万十町ネット販売推進協議会の補助金が467万ということで、一番大きくなっております。今後におきましても、ここが一番大きくなってくるかと思えます。続いて、外商に取り組んでいる事業者なのか、それとも取り組む前の事業者のどちらを支援するのかといったご質問ですけれども、それぞれの目的に合わせてということになりますが、どちらかといいますと外商推進委託料につきましては、既に実績がある会社を主にターゲットとして、その販路を拡大する事業です。また、外商力強化支援委託事業の方につきましては、外商に取り組む前の会社も合わせてターゲットにして、外商力をつけてもらって引っ張り上げていくではないですけども、実力をつけていただくといった組み立ての事業となっております。続いて商品開発についてですけれども、いくつかございますが、目標数値というものは設定しておりません。外商力強化支援委託事業では、アドバイザーに個別相談にのっていただいております。

すが、その中には商品開発に結びつくものがあると承知しています。

（八木会長）

他の方でご質問はございませんか。

（酒井委員）

四万十川の保全と資源活用によるプロジェクトですけれども、こちらは毎回見るたびに思いますが、この今回評価という話ですが、川だけにフォーカスして一生懸命取り組んでみても効果が見えにくいかなと感じていて、今年は梅雨が異常に早く開けてしまった関係もあって、山の保全がきちりできてなかったら、川にもきちんとした水が行かないと考えますので、こういう事業を計画する時は川の事業と山の事業がセットであれば理想的かなと感じます。

予算としては全体の円グラフの状態を、今日もホームページで見て、多分この事業は教育費6%のところから出ているのかなと思いますけど、6%だとやっぱり山の事業まで入れたらとても賄いきれないから、農林水産のところとセットで実施することは可能なのかなということをお伺いしたいのが1点と、あとやはり鮎を中心ということなので、友釣りのことに特化しているので、去年はコロナで中止とか川が増水して中止っていうことがあったと思いますが、川ガキみたいな感じで川に親しむっていうことを考えたら、通年で魚釣りは別の魚種でもできるわけなので、できたら釣り全体で考えてイベントとして始めてみるのもありなのかなと思いました。友釣りはすごく難しいというのも、ものすごく面白いっていうのも聞いていますので、企画としては良いと思いました。あともう1点ですが、ネット販売推進協議会の方ですけど、成果の方の9月までの売り上げが203万っていうのは、例えばですけど1社がかなり売り上げを上げて、他のところがあんまりなかったのかとか、そういった内訳を知りたいなと思ったのと、外商力強化支援委託のところですが、全体講義が4回あった中で、参加企業数の事が書かれていますが、これはだいたい窪川の企業さんが多いのかどうなのかということの、2点をお伺いしたいと思います。

（事務局）

最初の質問で、四万十川の事業と一緒に林業の関係の事業もセットで組み合わせて頂いたらよかったのではというご意見をいただいていたのですが、委員さんがおっしゃられるとおり川と山とセットでということは、当然事業の組み立ての際に必要なことだと思いますが、今回この事業を申請するにあたっては、まず財源ですが、他の国や県からの補助金でありますとか、そういったものがあるものについては、いったんこの事業からはのけて、事業を組立てた関係がありましたので、林業の関係は他の補助事業もありまして、これとセットでは今回組み合わせてはおりませんが、そういった事情でこの事業には山の手入れであるとか、山の事業が組み合わさってないということでご理解いただけたらと思います。

（企画課：中井四万十川振興室長）

友釣りを対象に今回させていただいておりますけれども、まず鮎漁の中でも友釣りの方が、一番経済効果といいますか、実際にお客さんが訪れて釣っていただくということで、生み出す付加価値というものが高いのではないかとことを想定して、まずはその第一歩の入門編として、高校生対象の友釣り甲子園というのと、一般の方を対象にした大会を始めようかということでやっておりました。これまで四万十川では、なかなかこういった大会自体が少ないというのと、その一方で四万十川自体は鮎釣りのメッカであるというところで、一般の方は自分たちが把握してないけれども、結構な数が来られているのではないかとというようなところもありまして、昨年度段取りをしていました。ちょっと運が悪かったという言い方は大変申し訳ないですが、予備日を構えてなかった関係もありまして、こういったコロナであるとか、増水で中止ということになっておりましたので、一応今年度の方も 7 月 31 日と 9 月 11 日で企画しておりますので、まずは晴れることを祈っているところです。

（八木会長）

この項目で他にご質問はありませんか。答弁がありますね、お願いします。

（にぎわい創出課：小笹課長）

ネット販売のリバースストアといいますけども、その売り上げについてですが、全体の商品数で言いますと 200 商品ぐらいございました。参加事業者数も 34 事業者ありまして、1 社どうしても、季節ものだったので、その時期に集中した形での販売となったということもございました。あと、外商力強化支援委託事業で、参加している事業者についてのご質問だったと思いますけれども、これにつきましては、外商に参加していただいている事業者さんを各地区で把握しておりまして、全体の事業者数で言いますと窪川が多くなるということですが、分け隔てなく声掛けをしておりますし、個別相談についても希望があれば大正・十和まで出かけていって、一緒に個別相談を受けるという形をとっております。

（酒井委員）

例えばですけど、十和は参加する事業者自体が少ないっていう理由の中に、きちんとお知らせや広報をしていただいても、それに応える力がないとか、それをするのができないといった、課題みたいなものが見えたところはありませんか。

（にぎわい創出課：小笹課長）

そうですね、どうしても大正・十和となりますと、外商については人員体制が整っているとか、外商の経験があるといいますか、製品としてちゃんと出荷できるかどうかといったところも非常に大切になってきます。そこに結びつけるだけの力があるか、意欲があるかっていうのは非常に大切なところでして、大正・十和はどうしても小さな事業者さんが多いので、それを取りまとめる事業者さんに対してのお話だったりという形になったりもします。ただ、大正・十和でも個別相談や商品開発に向けての取り組みも行っておりますし、外商に

において大正・十和の物を、他の事業者さんを仲介して実際に販売につなげたこともあります。

（八木会長）

続きまして、（２）観光資源の活用①四万十川PRツール作成・利用事業について説明をお願いします。

（企画課：味元係長）：

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。続きまして、②受け入れ体制整備促進事業についてご説明をお願いします。

（にぎわい創出課：笹岡係長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。それでは、（２）の観光資源の活用についてご質問等ありましたらお願いいたします。

（浅野委員）

海洋堂ホビー館の関係で質問させてください。令和２～３年とコロナの影響で非常に交流人口って少なくて厳しい状況だと思います。そんな中で入場者数と実績を上げてくださっておりますが、コロナの厳しい状況においても、この数字は貢献したというふうに思われているのか、それともやっぱり令和元年コロナ前と比較をしたらかなり落ちているので、そのあたりをどう捉えているのか教えてください。もちろん県や全国が落ちている状況ですので、当然落ちるとは思いますけど、この数字をどういうふうに捉えられているのか、それをお聞かせ願いたいということと、それから、この１９００万の事業費、この中には、ホビー館スタッフの人件費も入っているのでしょうか。それとも企画展のみの予算になっているのか教えてください。

（にぎわい創出課：小笹課長）

まず入場者数についてですが、そこについてはコロナ前より落ちております。コロナ前が、２６，０００人だったと思います。それで、その時点で目標数値を２９，０００人と定めて、色々と事業展開していこうということで目指していたというのを聞いております。開館当初は、６万人いたわけですが、そこがだんだんとやっぱり、皆さんも慣れてきたというか。リピート率はそれほど高くなかったのかもしれませんが、だんだんと落ちてきた

という状況で、昨年と一昨年はコロナの影響で非常に落ち込んできたと、入場者数につきましては、本当にその昨年度はコロナの厳しい中で、ウルトラマンの企画が話題になったことで、そこで非常に版權も厳しいウルトラマンという題材を扱って頂いて、県外からもイベント時には非常に多くの方が来られましたし、健闘したのではないかなと思っております。ここをどう今後回復させていくのかといったところは、今年ホビー館が10周年と言うことがありまして、10周年でリニューアルということで休憩室と地域産品の販売所といったところですか、団体客を受け入れてイベントができるようなスペースを構えております。こうしたことと、周遊企画の方も続けておりますので、あと南国市のホビー館とも連携をしてイベントを組むようにしています。面白いイベントを実施して、誘客を図っていききたいというふうに考えております。そこにつきましては、執行部の方もホビー館との連携というところをしっかりとやっていききたいというふうに考えています。それと、1900万円のうち人件費も入っているのかというところですが、こちら指定管理料も含まれていますので包括的にはその中に含まれているということでございます。

（浅野委員）

ありがとうございました。入場料収入が1400万弱で人件費も含めた事業費が1900万ということですので、費用対効果としては素晴らしいものがあつたのではないかと思いますし、数字に表れてない企画のすばらしさ等々があつたと思いますので、ありがとうございました。

（八木会長）

他にご質問はございませんか。ないようですので、次に進めたいと思います。四万十川流域の豊かな暮らしを育む取組で、（１）資源回復のための取組についてご説明お願いいたします。

（企画課：中井四万十川振興室長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ここまでで何かご質問はありませんか。

（野村委員）

例えばうなぎでは、下流でシラスを全部取りつくして、中流域まで回ってこないという現状が多分あると思いますが、鮎とかに対してはそういうことはないのでしょうか。実際、鮎は川を下って海から遡上してくるわけですよ。例えば途中の下流域で四万十市とかで、大掛かりにとってしまうために、上流域や中流域まであまり回ってこない、遡上してこないとか、そういうことはないのですかね。

（企画課：中井四万十川振興室長）

鮎につきましては、春先に遡上してきます。遡上段階でだんだん大きく成長しながら登ってくるわけですが、基本的に漁が始まる期間というのがありまして、上流淡水漁協いわゆる家地川堰堤上流が5月15日解禁で、それより下流域は6月1日解禁ということになっております。鮎につきましては、どんどん上流の方に遡上する性質がありますので、基本的に解禁直後のいわゆる漁場というものはほぼ四万十町の管轄になっておりますので、下流域で根こそぎ取られるとかというような状況は、鮎に限ってはいえないのかなと思います。

（八木会長）

他にございませんか。

（酒井委員）

成果の方で、流域全体での資源調査と組合員へのアンケート実施により情報共有ができて、とても素晴らしい取り組みを行われたのだなと思って、その前段の方に漁協も5団体あって利害関係も異なるので、今までは連携した取り組み自体が難しかったとあるのですが、今回そういう共通の課題とか全部認識されたうえで、体感的にということで結構ですので、漁業関係者の方たちの協力体制が見えてきたなというのがあったかという点と、このカワウの追い払いについて成果はありましたか。

（企画課：中井四万十川振興室長）

まず各漁協間で協議をする場ってというのが、そもそも今まではなかったというのと、同じ情報を元にして話をするという場面がこれまでありませんでしたので、共通の話題としてという部分からまず始めることができたのかなというのと、昨年度につきましては、四万十川漁業振興協議会という組織がありまして、こちらで流域の漁協と四万十市と四万十町で形成する組織というのができましたので、漁協の統一という話にはなかなかかならんと思いますが、こういった場で全組合長が顔を出して、同じ問題を同じ場で協議するという取り組みのスタートが切れたと思っております。それで、反省点が一つ抜かっておりましたが、この調査した結果について漁協間では共有しておりますけれども、データ量が大きくてホームページに掲載しておりませんので、そのあたりは一般の方にも広く知ってもらおうという意味でも、そういったところの取り組みが必要かなと考えております。あと、カワウの追い払いの効果についてですが、実際は本来駆除が一番効果的ではないかと考えるのですが、なかなか四万十川に向けて鉄砲を撃つというような事が規制もあってできません。また、カワウ自体が撃って落とすというのが難しい鳥です。追い払いに関しましては、朝昼晩三回出してもらうので、なかなか労力的には大変ですが、実際金額的には100万円かからないところでやっております、特に鮎の稚魚の放流直後にカワウが飛んできますと一日でだいたい500gとか食べると言われております。一匹が10gとか13gですので、一日で何十匹も一羽が食べてしまうというのを、人が追いかけることで追い払うということで、それなりの

効果はあったのではないかというふうに考えております。

（酒井委員）

経費の内訳報告書の内容ですけれども、この資源回復のための取り組みの中の水産資源調査委託料と水産業振興事業補助金がかなりの内容を占めていると思いますが、簡単でいいので、こういったところに使われているかを教えてください。

（企画課：中井四万十川振興室長）

水産資源調査委託料の方ですが、西日本科学技術研究所といって、鮎資源であるとか、川の調査を専門的にやっているところがありまして、こちらの方に委託を致しまして、先ほど内容等で説明させていただいたようなものを全部行ってもらっております。また、水産業振興事業補助金ですが、これの内訳ですが町内に2つ漁協がありますので、そちらに150万円ずつで合計300万円を鮎の稚魚の放流として、あと漁場管理等ということで、川に降りて行く道の草刈りでありますとか河川ゴミの回収、あとは東部漁協管轄でいうと入川道の看板をつけて漁業者さんを誘導するような形のものをお願いするというので、淡水漁協の方に300万、東部漁協の方に150万をお支払いしております。

（八木会長）

ほかにご質問ございませんか？

（鈴木委員）

そもそも論の質問で恐縮ですが、このカワウは鮎資源の減少に本当に影響しているものでしょうか。外来の生物ではないと思いますが、そのあたり自分は疑問があるのですが、その辺の検証というのはいかがでしょうか。実は他に原因があるのではと、素人ですけど思ったりします。

（企画課：中井四万十川振興室長）

鮎資源そのものの減少にカワウがどれくらい影響しているのかっていう比率的なものは分からないのですが、先ほど言いましたように、稚魚の放流した時の時とかに1羽あたりでも1日で500g食べると言われていますので、1羽につき、1日50匹くらい食べて行く。四万十川流域でどれくらい生息しているのか、はっきりした数字はわかりませんが、大正の下津井の辺りに巣があるというのは確認されております。そこから大ざっぱな計算ですけれども、200羽はいるとして経済的な損失みたいなものも1度計算したことがあります。全く追い払いせずに何も手をつけずに単純に1羽が毎日500gずつ食べていて、鮎が生息する時期ですので、大体7ヶ月くらいとして見込んだところではっきりした金額を忘れましたけれども、単純に何千万単位くらいにはなるというところの計算から、やっぱり追い払い等で少しでも軽減する必要があるのではないかということをやっております。具体的な生息状況であるとか、あとは巣があるとはいえ、例えば新莊川とかですね、愛媛県の

方からも飛んできますので、実際に四万十川全体でどれくらい飛んできているかっていうのは、あくまでも推計ということにはなります。あと、カワウ自体が一時期、1970年代だったか絶滅危惧ぐらいまで減少したことがありましたけれども、そこから保護策をとったことによって、今度逆に爆発的に増加しております、全国的にもやっぱりカワウの被害っているのはものすごく大きいということにもなっておりますので、先ほど事業の内容の中でも言わせていただきましたけれども、何千万もかけてカワウの追い払いというのはもちろん費用対効果が悪いと思いますが、現状で言いますと年間100万弱で行っておりますので、資源の減少と比較した時にやっぱり効果としては、高いのかなという判断を今のところはしております。

（八木会長）

私の方から質問させていただきたいのですが、今のカワウの件ですが、先ほど5漁協で話し合いをされたということですが、そういうことがテーマの中に入っていない wasn't it でしたか。

（企画課：中井四万十川振興室長）

漁協間の中でもやっぱりカワウの対策については議論があるのですが、漁協としてやっぱり追い払いよりは直接駆除の方をもっとやってもらいたいという意見もありまして、この事業には入ってないですが、昨年度は流域全体で猟友会の協力で一斉駆除も実施しましたが、先ほど申しましたように、なかなか撃ち落とすというのが難しい鳥ですので、一斉駆除をやった時には成果としては0というふうに聞いております。ですので、何かしら対策というのは今後も検討はすべきと考えております。

（八木会長）

この項目についてご質問はございませんか。それでは次に進ませていただきます。（2）の四万十川流域の環境保全の①環境対策事業について、まず説明をお願いします。

（企画課：水田係長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。続いて、もう1件の②景観保全事業についてもご説明をお願いします。

（企画課：中井四万十川振興室長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。それでは今報告されました四万十川流域の環境保全についてご質問ありましたらお願いいたします。

（山本委員）

食品ロスやSDGsについてのところですけど、量販店なんかで安く売っているところなんかありますけど、そういうのを町民の方がたくさん知っているのかなと思います。それと、消費期限と賞味期限の違いがきちんと分かっているかなというところも気になりました。また、私は最近量販店でビニール袋をもらわないようにしていますが、町が回収しているビニール袋やペットボトルのゴミの量については多くなっていますでしょうか。

（企画課：水田係長）

賞味期限と消費期限のお話ですけれども、ひょっとしたら消費期限と賞味期限をよく理解されていない方もいらっしゃるかも知れませんので、この食品ロスの削減の啓発と合わせて、そういったところについても説明を入れるとか、また食品を購入するときに、賞味期限が長いものを取りたいという気持ちにどうしてもなってしまいますけれども、町の方としては食品ロスを減らしていくためには、やっぱり賞味期限が近いものから取っていただくという取り組みを進めていきたいと思っていますので、そういった広報とか啓発に努めていきたいと思っています。それから、ビニールとかペットボトルなどの廃棄の量が増えているかどうかということについてはですが、すみません、確認ができていないのでお答えできないのですが、自分の個人的な実感としてなんですけれども、スーパーやコンビニでも袋に入れますかって聞かれて、結構いりませんって答えている人多いのではないかなと思っていますので、以前と比べるとビニールとかペットボトルとかの廃棄量は減っているのではないかなと思います。マイボトルなどの取り組みについても、環境水道課の方が広報を通じて、啓発の方もしておりますので、そうしたところの取り組みは徐々に浸透しているのではないかなと思います。

（山本委員）

最近ですけど、ゴミを出すときによくマスクが落ちています。それから国道沿いなんかも落ちていますし、啓発なんか出来ないでしょうか。

（企画課：水田係長）

マスクについては、テレビでも取り上げられることがあります。落としたマスクを誤飲したことによる野生動物の被害なんかもあるということで、当然落とそうと思って落としている人はいないと思いますが、どうしてもポケットに入れたまま歩いた時や、外した時に落ちてしまっているのかなと思います。こういうことは、気をつければ解決できることではないかなと思いますので、今後広報など通じて周知していければと思います。

（山本委員）

マスクを入れる袋というか、そういうのがありますけど、そういうのも活用したらよいと思います。

（川添委員）

私は四万十町在住ではないので、四万十町在住の職員にこの食品ロスの問題について、町の取り組みでどんなことが思い浮かぶって聞いてきました。そしたら「もぐにいシール」を賞味期限が近くなっている商品に貼って、それを10枚集めるとメリットがあるので楽しいのでいいよねという話がありましたけど、そのような取組があると聞いたのですが、その取り組みって町が推進している取り組みなのかということと、何店舗ぐらいでそういうのに取り組んでいるのかなってというのが知りたいなと思いました。七里小学校も10月にこの出前授業を頼んでいるので、子供からもそういう疑問が出るとも思いますけど。

（企画課：水田係長）

「もぐにいシール」なんですけれども町が表立って推進はまだしていないところではあります、株式会社アッシェさんという高知市の企業さんと提携してまして、「もぐにい」を作っている会社ですけど、その会社がハマヤさんで取り組みをさせていただいておりまして、シールを集めたら例えばガチャガチャができるというような取り組みをやっております。四万十町内で他の事業所さんで、取り組んでいただいている所はどこがあるのか把握しておりませんが、今後そういった取り組みについては広げていきたいと思っております。

（鈴木委員）

今までの話に水を差すような事になってしまうかなとも思いますが、この成果の中の無駄な食品を買わずに済んだことによる地域経済への波及効果も7000万円程度に上ることが分かったってありますが、これはどんな計算をされたのかなと思いました。というのは、私が想像するのは、その家庭で買う予定だった値段を合計すると7000万円ぐらいで、でも例えば販売する側にしてみたら、7000万円程度の食品が売れずに多分配置されるなり何なりされたのではないかなと思いますが、ここの7000万円に喜んでいいのかどうかという疑問がありますけど、どんな計算でしょうか。

（企画課：水田係長）

ご説明が足りなくて申し訳なかったのですが、この7000万円の計算ですが、食品ロスとなった廃棄量の重量を、単純に100gが1個100円のおにぎりっていうふうに換算した場合にそのぐらいの経済効果があるということで、例えばその食品の廃棄量を半分にした場合に、それぐらいの経済効果が出るという計算をしております。確かにですね、それを買っていただいた事業者さんはそれが儲けになるわけですので、単純にそれがいいじゃないかっていえないと思いますが、ただ、それを買ったけど、食べもせずに手付かずで捨てている

食品がかなりあるということも分かっておりますので。それをもし仮に買わなければ、その買わなかったお金を家計の他の部分に回せるということになりますので、そういったことも意識しながら買いすぎないようにとか進めていくことは必要じゃないかなと思っております。

（鈴木委員）

すみません、この取り組みって私はすごく疑問があるのです。なぜかという今、私達は食糧難ではないので食べ物豊富にありますよね。私は家庭で食事の用意を家族のためにする時に、足りないことのないように気をつけて用意します。それで、家族全員のお腹の具合を計算してロスのないように調理するっていうのは、私にはほぼ100%無理でほぼ毎回残るのですね。この時代において残るっていうのは当たり前なことだと思っていて、それでその残ったものをどうやって処理していくかっていうことを私は本当に考えた方がいいのではないかなと思っていて。例えば、町の取り組みの一つとして、コンポストを配ってくださっていますけど、それは本当に素晴らしい取り組みだと思っていて、今後も是非続けていただきたいと思っています。ただ問題はそういうものが置けない家があったり、とてもそれでは賄いきれないくらいいっぱい出してしまうお店であったり、そういう事業者がどうしてもあって、そこを社会の仕組みとして、どうやって受け止めていくかっていう仕組みを作った方が私はいいと思っています、子供に食べ物は大事だよっていうことはとても大事だと、もちろん否定はしないですけど、そうではなくて、子供をどうこうしようじゃなくて、この有機物をきちんと分解して土壌に戻していくっていうことを、もっと社会全体で仕組みを作っていただきたいと思っています。私が言うまでもなく家庭のゴミに生ごみがいっぱい入っていて、それはとても集める時に重いし、燃やす時にも聞いた話ですけど、化石燃料をかけて燃やさなくちゃいけないとか、凄く無駄なことをしているので、ぜひ有機物を循環させていく仕組みを作ることに私は重きをおいてほしいです。

（企画課：水田係長）

委員さんおっしゃられますとおり、廃棄物をどういうふうに自然に循環させていくのかというのはすごく大切なことですので、こちらも同時に考えていかなければいけない問題だと考えております。食品のロスの削減については、SDGsを進めていくうえで、身近で分かりやすいところで言うと、世界規模で今、食品廃棄っていうのが問題になっていますよということで、一つ例にとって、何か自分たちが出来る事ってないかと考えたときに、少しずつでもそういう意識を持つことが大切だと考えています。大量生産、大量消費ではないですが、ただ単にものが売ればいいやっていう考え方じゃなくて、そういう環境のことも考えながらやっていきたいと思いますという意識を持っていただくということがまず大事なかなと思っています。そういったところを育てていくっていうところで、一つこういう切り口があってもいいのかなっていうところで思っておりますので、ご理解いただけたらと思います。

（八木会長）

総合振興計画の後期計画の中に、循環型社会の推進という項目がありますが、町の方もこうしたことを家庭まで届けながら、住民参加の活動につなげていくように、ぜひお願いしたいと思います。他にご質問はありませんか。それでは最後の項目に行きたいと思います。

（3）ふるさと教育事業①川ガキ育成事業についてご説明をお願いします。

（生涯学習課：味元課長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（人材育成推進センター：横山次長）

続きまして、私の方から人材育成推進センター行いました事業についてご説明をさせていただきます。評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。それで続きまして高知大学連携事業についてご説明をお願いします。

（企画課：中井四万十川振興室長）

評価資料に基づいて説明《説明省略》

（八木会長）

ありがとうございました。最後のふるさと教育事業についてご質問もありましたらお願いいたします。

（酒井委員）

1点目ですけれども、生涯学習課さんと人材育成センターさんのふるさと教育事業の川ガキ育成事業の方で事業費が1700万超なんですけど、この予算の配分は、わんぱく学校の方ではいくらだったのかっていうのを聞きたいのと、わんぱく学校は本当に私の子供も毎年楽しみにしていて、今年ももう行かって決めて申し込みもしましたけど、実感として子供たちはすごく交流に飢えているところがあってですね。同じメンバーですっと小さい頃から少人数でやってきているから、今は参加人数が少ないかもしれませんが、こういう取り組みを行ってくれていて、ほかの地域の子たちとお話することに、すごく喜びを感じています。参加した子にもよりますが、私の周りでは少なくともすごく喜んでいる子がいて、毎年参加するみたいな感じになっているので、冬とか夏に限らず、そういう交流ができる機会を是非提供していただけたら嬉しいなっていうのと、それと同じ意味合いで、高校もやはり同じ地域内からくる子が多くて、やっぱり人数も限られていて、高校生や若年層は特に色んな人と交流を本質的に求めていることが多いと思うので、県内同士の高校の交流っていうのはなかなか難しいとしたら姉妹校を提携するなどして、他の県の学生との交流があれば魅力の

一つかなっていうふうには思います。

（生涯学習課：味元課長）

まず参加していただいて喜んでいただいて大変感謝しております。ご質問のありました生涯学習課の事業の予算的なものでございますが、ラフティング艇の借り上げ料が20万5千740円。これは経費の内訳報告書のところにも書いてあるのですが、あとふるさと学習講師謝金として、家地川のけやきという施設ができておりまして、そこでピザ作り体験とか、火おこし体験を行っております、その講師謝金として4万円を使用させていただいております。あと、冬の活動ということですけど、去年はちょうど冬の時期にコロナがかなり発生したもので、間伐体験やキノコの菌打ち体験を予定していたところですが、それが中止になったということで、今年度はぜひともやっていきたいと思いますので、参加のほどよろしくをお願いします。

（酒井委員）

そしたら、この1700万の予算の事業費っていうのは、ほぼ人材育成センターさんの方っていうふうに考えたらいいですか。

（人材育成推進センター：横山次長）

お見込みのとおりでございます。それと、もう1件生徒の交流という部分につきまして、今回の事業と離れますが、四万十高校においては全校生徒62名いる中で20名程度が町外または県外から来られている方です。やっぱりコミュニティが固定化するっていうところが、地元高校が選ばれない理由でもありますので、四万十高校は県立の寮があるということもあって、全国から生徒を募集する地域未来留学っていう事業にも参画をしているところで。そういった部分で様々な、生徒同士の交流と言う部分も深めていきたいと思ひますし、また、町外の高校との交流という部分につきましては、私どもが町営の塾を運営する関係でその運営を委託する会社がありますけど、こちらの方が全国的にもなん拠点か公設塾を運営しておりますので、その塾生同士をつなぐような取り組みも、昨年度ぐらいから続けておりますので、そういった部分で学校外になりますけど、有機的に子供達が繋がるような環境は今後作っていききたいなと思ひているところです。

（八木会長）

他にご質問ございませんか。

（尾崎委員）

人材育成推進センターさんに質問させていただきたいですが、成果の中で町内の中学校からの進学率も40%を回復したというお話があったのですが、この回復した理由というか、そういったものはどういったものがあるのかなというところと、高校の方で例えば、保育園とか、小学校、中学校との交流というものを行っているのかどうか、身近にこういうお兄さ

んになりたい、お姉さんさんになりたいというような目標になれる人がおれば地元高校に行ってみたいなどかいうのもあるのではないかなと思います、その辺いかがでしょうか。

（人材育成推進センター：横山次長）

進学率もしくは進学者数が今回増加した要因はなんなのかといった部分ですが、正直よくわかりません。どうしてかという、おそらく様々な要因があるのではないかなと認識しています。一つはこういった高校魅力化の事業が平成 28 年度からだいたい 6 年、7 年目を迎える中で、一定町内にそういった事業をやっていると浸透してきているのではないかなと思うことが一つと、もう一つはやっぱりコロナ禍において、やはり外の高校に行かすのは心配だなんていう親御さんが若干いるのではないかなと、後は様々な町内高校へ進学する生徒さん若しくはその世代に対して、事業展開を令和 3 年度から本格的に行っております。学校給食を高校に配色するであったりとか、入学祝い金であったりとか。前からやっている分という公共交通の通学費の助成とかですね、そういった部分の支援が、一定浸透してきたのではないかなと思っていますので、どれが一番効いていたという部分はなかなかこちらとしても判断しづらいよねという話をしているところです。もう一つ、地元の兄ちゃん、お姉ちゃんに憧れてその高校を選択するっていうところがあるっていうことが、一番理想的な形じゃないかなと思っています。窪川高校においては農業コースの方が茶畑を作っている関係で、地元小学生と一緒に茶摘み体験を行っています。また、四万十高校においてはイベント活動をする中で、そのイベントの販売活動を高校生が手伝うことによって、中学生とか小学生にも触れ合う機会は増えているのではないかなと思っていますが、そういった部分も今後は、高校としてやるのか、町としてやるのか、どちらがやるのかまだわからない部分ではありますけど進めていくべきではないかなと思っています。それで、1つその関連で言うと、今年度から高校生を対象としていた町営塾を全町的に中学 3 年生まで拡充するようにしています。それは中学 3 年生の段階から公設塾を体験することによって、地元高校でも学びの場って確保されているよね、こういった人たちと一緒に学べるのであれば地元高校へ行ってみようかなといった部分を呼び水としてやっているという部分と、あとは、高校生と一緒に活動することによって、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいるから憧れて、地元高校に行こうかなという部分で、中学部っていうのを創設しましたので、そちらの方もいい結果が生まれたりいいなと思っていますところ。

（八木会長）

ありがとうございます。他にご質問ございませんか。

（藤澤委員）

窪川高校でコーディネーターさせてもらっています藤澤です。質問ではありませんが、この予算のうち沢山いただいているなと思いながら見させていただきました。窪川高校への進学もそうですけど、地元高校への進学者が増えた理由について、はっきりとは分からないというお話がありました。本当にいろんなことがあると思います。保護者の話を聞くと、さっき

話がありました高校への給食が大きいということを聞きました。私達は、給食は学校給食ではなくて高校給食と呼んで、それこそSDGsにも取り組んで、なるべく食べ残しは許しませんという感じで優しく言って、それで残ったものをおにぎりにして、食べさせるなどいろいろ工夫をしています。だから、給食センターの中で小中高どれくらい残食があるのか、いつか聞いてみたいなと思いました。それから、先程交流ということで、ケーブルテレビで見ただただいたかも分かりませんが、6月5日に高校の体育館で38組の親子保育園の子供達と、小学校3年生、4年生ぐらいまでの子供さんたちと、最高齢80歳ぐらいまでのおばあちゃんも140名以上集まって、リズム表現で遊びました。その時にまさかそんなに手を挙げてくれると思わなかったですけど、高校のおとなしい子供たちが16人、男の子もいましたけど、ボランティアをしてくれました。それで恥ずかしそうではありましたが、リズムしたり、スキップしたり、小さい子とも楽しそうにしてくれまして、参加した大人たちの方からも高校生と関わった事が良かった。本当にお兄ちゃんお姉ちゃん可愛いとかいう感じで、アンケートにもいっぱい書いてもらいました。それで、それを校長先生以下、職員、教職員の先生方にも報告したのですが、やっぱりそういう関わりは本当に大事だなんて思いました。またこういう事があったら、ぜひ声を掛けながらやりたいなと思いました。

(八木会長)

他にございませんか。

(神田委員)

前もちょっと言いましたけど、自分は元教員だったので、やっぱり地域に学校を残していくということはとても大事な事だと思っています。高校生の入学者が増えたっていうのは多分、通学している子供たちの顔が良いからだと思っています。これはもう先生方、もちろん人材育成センターの皆さんや生徒たちの頑張りのあって、学校が運営できているのだろうなと。それはたぶん皆さんが見ていてそうじゃないと、やっぱりいくら触れ合ってたって知っているからといって、行けるというものではないと思うので、それがだんだん現れてきたのだろうなというふうに思っています。それで、その一方で、なんで県教委は20人を割ったらみたいなことを言い出すのかなと常々思っています。これは質問じゃなくて町にお願いですが、おそらく今までもされていることだと思いますけれども、次期の統廃合の計画が出る前にやっぱり町からも強く、そんなこと言うなということを是非言っていただきたい。そうじゃなくて、こちらでもやっぱり高校の魅力を高めていくとか、子供達に必要な力をつけていくとか、もちろん今までも努力されていますし、充分成果としても現れていると思うので、そんな人数で切るようなことじゃなくて、やっぱりここから人口が減少していくのは目に見えているのだから、減少している中で何をしていくかっていうことを知事部局は県教委に対しても強く言うべきじゃないかというふうに思います。これはもうお願いですかね、以上です。

(八木会長)

ありがとうございました。他にございませんか。

(横山(順一)委員)

窪川と四万十高校の存続要件とかっていうのが書かれて、今お話もあったのですが、高知県は僻地の学校もすごく多いということとか、地域性も考えて、県教委は存続要件で1学年20名以上というのを打ち出していますが、これは県教委の肩持つわけではないのですが、結構存続要件を低く設定しています。他県はもっと30名とか40名ぐらいに設定をして、これはある校長先生の話ですが、やっぱり人が集まらない学校はあってもすごくきついの、あっても仕方がないと、やっぱり整理統合して魅力ある学校をつくっていくのがいいのではないかとことも言っていた方もいたわけですけど。やっぱり高知県はそういったいろんな事情もあって、20名以上というような数値を、人数の問題ではないかもわかりませんが、また中村高校の西土佐分校ですかね。そこもかなり少ないですけど、地域性を考慮してということで存続しています。今後も生徒数とやっぱり今後厳しい状況がすごく続いていくというのが想定されて、人材センターの横山さんが生徒数なんかのデータもおっしゃっていたので厳しい状況がすごく続くと思いますが、やっぱり今、高校の魅力化というところに、全国的にも取り組んでおりますけど、四万十町もすごくいろんな取り組みをされているので、ぜひとも行政とか、高校も独自で自分の学校を高めていくっていうのはすごく大事なことですけど、高校振興対策監とか、そういった方々と人材育成センターなどの結びつきをより強くしてもらえたらと思います。今後、県教委のトップが変わったら、20名というのは、もっと厳しい条件を出してくるかもわかりませんので、ぜひ危機感を持って取り組みをさらに工夫して取り組んでもらいたいなという願いです。よろしくお願いいたしますと思います。

(八木会長)

ありがとうございました。他にございませんか。ないようですので、ひとまず評価シートの方についてはですねご記入のうえ、本日ご提出をお願いしたいと思います。それでは、今後のスケジュールについて事務局よりお願いします。

(事務局)

次回の会議が7月14日の木曜日に開催を予定しています。それで、委員さんの任期が8月で終わりなので、これが最後の会になろうかと思います。現在の振興計画の審議会委員の公募につきましてはホームページや広報で募集しておりますので、7月8日を締め切りとしてやっておりますので、また引き続きやってみたいなという方いらっしゃいましたら応募の方をお願いしたいと思います。

(八木会長)

委員さんの任期が8月2日までになっておりますので、委員の皆様には2年間、会議へ

の出席をいただきまして、誠にありがとうございました。コロナ禍の中で委員同士の十分な意見交換とか交流ができておりませんでした。最後の会が7月14日ということですのでよろしくお願いします。それでは、閉会にあたり副会長のご挨拶をお願いします。

（船村副会長）

皆さん長時間の会議お疲れさまでございました。次回が任期最後の会議になるということですので、次回もぜひご出席をいただくようお願いいたしまして、会議を閉じたいと思います。それではお疲れさまでした。

－ 閉 会 －